

は、またしばらく同じ東京で、彼が京都へ、私が仙台へと別れ別れになるまでつづきました。しかしこの時は、お互に食えること着ることに勢一杯でしたし、どちらも生活の本拠を失ってしまつて振出しに戻つたような暗澹たる状態でした。そして彼はこうした中から意欲的な研究を発表していったのです。先にあげた『宗教文化史学序説』もその一つですし、『宗教研究』その他にこの頃矢つぎ早やにラディンやワッハの学説についての論文や評論を発表したものです。彼の実に五年有余にのぼる外地での拘束された生活にもかかわらず、こうした学問の意欲を絶えず燃やしつづけて挫折しなかった、その意志力には、一度応召はしたが即日帰郷を命ぜられて、内地で右往左往していた私には、本当に頭のさがる思いだったし、同時にいつか彼にはコンプレックスを感じさせられてきたものです。

よい意味でのライバルであつた棚瀬君は、ときどき辛辣なことをいって、人の心肝を寒からしめることもあつて、私は自分の領分をはみ出して、民族学的な方面のことを口にしたりするとき、いつも棚瀬君の顔が頭に浮んで、またあいつに何かいわれはしないかと、心の奥に一種のわだかまりを感じてもきたものです。

彼が今、急にいなくなってしまうと、私はある意味で、何だか目標を失つた、心の張りのなくなつてしまつた、空虚さに襲われています。私は靈魂の存在を信じませんから、彼の靈がどうこうとも、それにどうしようとも考えませんが、棚瀬君の無言の批判が、いつも私の仕事の進みの上に、反省と鞭撻の役割を果たして、生きていたときよりは却つて始末のわるい存在に化したような気さえします。彼が私の上に及した影響や感化は、私の今後の生涯について離れないことでしょう。彼は私の上にも生きています。善友とはこういうものだったのかと、別れて後に一しお身にしむ次第です。杉浦君といい棚瀬君といい、宗教学と民族学の橋渡しをしてきた2人の俊才を失つたことは、本当に不幸なことでした。(1965. 1. 22)

東南アジア研究センター

と棚瀬幹事

本 岡 武

昭和39年12月10日、東南アジア研究センター・バンコック連絡事務所で、夕食後雑談をしていたとき、岩村所長から棚瀬幹事急逝の旨の電報がはいつた。まったく愕然たる思いにかられ、暗澹たる気持ちにつきおとされた。その後の詳報で狭心症のため同日午前九時倒れられたことを知つた。思えば10月はじめ、マレーシアから帰られた棚瀬さんと京都の東南アジア研究センター所長室で話しあつたのが、わたしが棚瀬さんとあつた最後だった。これまでの棚瀬さんとの短いが、しかし深い交わりをとめどもなく、つぎつぎ思いだす。

その思い出のうち、棚瀬さんの東南アジア研究センターのための御努力と御功績のほどを、ここに書きとめ、哀悼のしるしとしたい。

もともと、東南アジア研究センターの母体となつたのは、東南アジア研究会である。これは、昭和34年春に、当時の平沢興総長の御意向で東南アジア研究関係者が集まり、その協議にもとづき当時の文学部白井二尚教授が中心になつて組織されたものである。ちょうどそのとき棚瀬さんは竜谷大学教授兼学監から京大文学部に文化人類学担当助教授としてまねかれた。もともと棚瀬さんは、とくに東南アジアの民族を専門領域とされていたので(昭和36年3月に、これをテーマとして文学博士の学位を京大から授与された)、京大へ赴任早々から、発足したばかりの東南アジア研究会の実際上の幹事役をつとめられた。第一回の研究例会が開かれたのは、34年9月であつたが、今日まで70回以上も

つづいている研究例会はほとんど棚瀬さんが世話され、司会されたのであった。そのころ、研究会の代表は臼井教授であったが、棚瀬さんはコツコツと縁の下の仕事をしたのであった。この研究例会をもちそだてられたのは、棚瀬さんで、御自身でも37年4月「人類学の方法と調査」38年1月「マラヤの人口構成」の報告をされた。棚瀬さんにはじめてあったのは、翌35年8月、わたしがアメリカ留学から帰国早々、東南アジア研究会例会の席上で、アメリカにおける東南アジア研究の状況を報告させられたときだったと思う。

翌36年3月、東南アジア研究を本格的にすすめるため、フォード財団の資金で、臼井教授と棚瀬さんと、にわかに命ぜられたわたくしとの3人が、欧米および東南アジア諸国における東南アジア研究実情調査のため、半年旅行をした。わたくしが棚瀬さんをよく知ったのは、この6ヶ月まったく日夜行動をともにしたことにはじまる。この調査の旅行報告書（京都大学東南アジア研究会、「欧米および東南アジア諸国における東南アジア研究調査報告」昭和36年刊参照）は、大部分を棚瀬さんが執筆し、わたくしは一部を書いただけだ。旅行中棚瀬さんはその日の仕事はその日のうちにキチキチと手ばやくかたづけられるのに感心した。エール大学訪問のあと、大学のアルムナイ・ハウスの一室で、初夏の夜おそくまで、エール大学の東南アジア研究状況の原稿を書いておられた棚瀬さんの姿をいまでも、ありありと思い出す。この旅行は棚瀬さんの、はじめての海外旅行だった。なにしろ、臼井教授を団長とするチームであるから、いろいろな意味でのなかなかの強行軍。それを黙々として耐え忍んで旅行されたのが棚瀬さんだった。シナ事変から大東亜戦争にかけて5カ年間、一兵卒として従軍され、最後に伍長にまで昇進されたそうだが、ここでもまた、その経験が生かされたのだろうか、よく辛棒されたといった感じだった。この旅行の間は、よほど疲れられたのだろう。ホテルの一室でベッドにポカんと寝ころがっておられた姿をよく見たものだ。

さて、9月中旬帰国後の、この調査報告にもとずいて東南アジア研究計画の樹立、そしてそのフォード財団への資金援助の交渉がはじまった。これは人文科学研究所の岩村忍教授が中心になってやられたが、それを棚瀬さんは、よく助けられた。とりわけ岩村教授は棚瀬さんの学識・人がらを高く評価されていたので、棚瀬さんとしてはいろいろ気苦労なことがあるものの、よく終始愉快に努められた。しかし、翌37年4月から、東南アジア研究センターにたいし大学院生一部から反対運動が起こり、いろいろとむづかしい場面にさしかかった。同年6月に京都大学として、東南アジア研究のため全学的体制を検討するため、東南アジア研究計画準備委員会が設けられた。当時の奥田東農学部長が委員長に選出されるとともに、棚瀬さんは委員会幹事を委嘱された。委員会の発足後、東南アジア研究計画にたいする反対運動がさらに激しくなった。棚瀬さんとしては、この間ただただアッケにとられることが多かったようだ。ことに反対運動の理解にはほんとうに苦しめられたようだ。もともとポリティカルなことが大きい棚瀬さんの温厚な性格としては、この反対運動と闘うというより、むしろおだやかな仏教徒として、なるべくこれから避けたいという気持ちが強かったのではなかろうか。わたくしは、このころの棚瀬さんの心境をよく理解することができるような気持ちがする。ときどき、「ほんとうにいやになる。辞めてしまいたい」とわたくしによく洩らされていた。しかし奥田委員長の人柄にすっかりうたれられ、「奥田先生がおられるのだから」とよくいっておられ、委員長が間接的に棚瀬さんのなぐさめになったようだった。このころ「東南アジア研究」が発刊されることになり、その編集責任者として、今日の同誌の基礎をきずかれた。

さて、この準備委員会の答申にもとずき、昭和38年1月に東南アジア研究センターが正式に学内に設立された。棚瀬さんはその常任委員会の幹事を委嘱され、センターの運営にあたられることになった。その年の4月から東南アジア研究計画第一年度にふみきられた。

この研究計画のうちの中核計画として、ビルマ、タイ地域計画とマレーシア・インドネシア地域計画とのふたつがえらばれた。棚瀬さんはマレーシア・インドネシア計画のリーダーになられた。

当時の幹事は棚瀬さんとわたくしとの2人だけだったが、わたくしが第1年度の九月からタイに赴いたあとは、棚瀬さんがただ1人の幹事として責任をもたれた。なかなか、たいへんだったと思う。そのかたわら、マレーシアの現地調査計画の準備や編成にあたられ、とりわけインドネシア語の学習を一生懸命やっておられた。そのときに、すでに53才になっておられたのだが、よほど学問的情熱がなければ、その年令で外国語の学習はできないのだ。

昭和39年4月から研究計画の第2年度に入り、棚瀬さんは、いよいよ出発準備に没頭された。6月はじめ、吉田光邦助教授（人文科研）といっしょに出発され、6月いっぱい、調査村落設定のために2人で、マラヤ全土を旅行され、調査村としてケダー州のアロール・ジャングスをえらばれた。（この村についての概報は東南アジア研究第2巻第2号に現地通信として寄せられてある。）

吉田助教授とは1カ月で別れ、そのあと7月から9月にかけて、竜谷大学口羽益生講師と京大大学院学生坪内良博君といっしょに、アロール・ジャングスでの定着調査を開始された。このマレー人の米作部落に住みこんでの生活は、若い人ならいざしらず、棚瀬さんの年令にもなれば、それこそ苦しいことは筆舌につくしがたいところだったと推測される。自分でコツコツと農家を一戸ずつ聞取りにまわられたそう。日本人としては、はじめてのマラヤの村落定着調査なのだった。この調査は棚瀬さんが出張期限の関係で九月下旬帰国されたあとは、口羽講師、さらに10月下旬からは東大東洋文化研究所の築島謙三講師がひきつがれている。

棚瀬さんは、この調査で、すっかり、へばってしまわれたらしい。調査中は、暑さはもとより、現地人と同じ食物や住居に困られたらし

いが、それよりむしろ睡眠がよくとれなかったのに苦しまれたようだ。いろいろと現地というより、むしろ国内からのストレスがあったようだ。しかし、棚瀬さんの帰国後、わたしは、さきにもいったように一度しか会わず、すぐにバンコックに出発したが、会ったとき一度も苦しさを口にしなかった。それが、棚瀬さんの真骨頂だろう。

10月くらい、再び東南アジア研究センターの幹事として努められたらしい。わたくしには連絡の手紙が一度だけしかなかった。なんだか、ひどく疲れられていたような感じを手紙から受けとった。そして、この12月10日には、急逝されたのだった。

棚瀬さんは京大に赴任されると同時に発足した東南アジア研究会からはじまって東南アジア研究センターのために、いままで、せいっぱいの努力を傾倒されたのだ。組織づくりから、その運営、さらに自分自身のフィールド・ワーク。まったくたいへんだったと考える。東南アジア研究センターが今日軌道にのり、着々と事業計画がすすめられているが、棚瀬さんに負うところはきわめて大きい。だから、棚瀬さんが東南アジア研究センターに殉職されたといっても、決して過言ではないだろう。

棚瀬さんになんと御礼を申しあげてよいか、わからない。ただ棚瀬さんが、わたくしに、「いろいろ苦しいこともあるけれども、東南アジア研究計画のおかげで、いろいろといい方に知り合いになり、仲よくやれるのは、ほんとうに愉快だなあ」と、口ぐせのようにいっておられた。棚瀬さんにとっては、たいへんだったが、同時に面白い5年間でもあったのだ。これが棚瀬さんにとっても、せめてもの慰めではなかろうか。

いまや第2年度後半期にある東南アジア研究センターとして、棚瀬さんを失ったことは、かけがえのない大きな痛手だ。謹しんで、御冥福をお祈りする。（昭和39年12月20日、バンコックにて）